

平成29年度病害虫発生予報第12号

平成30年3月2日
鳥取県病害虫防除所

予報の概要

区分	農作物名	病害虫名	発生時期	予想発生量
普通作物	イネ	ばか苗病	—	平年並
		イネシガラレセンチュウ	平年並	少ない
果樹	ナシ	黒斑病	平年並	やや多い
		黒星病	平年並	平年並
		ハダニ類	平年並	平年並
		カメムシ類	—	やや多い
野菜	ラッキョウ	灰色かび病	平年並	やや多い

気象予報（抜粋）

1か月予報（3月3日～4月2日：3月1日、広島地方气象台発表）

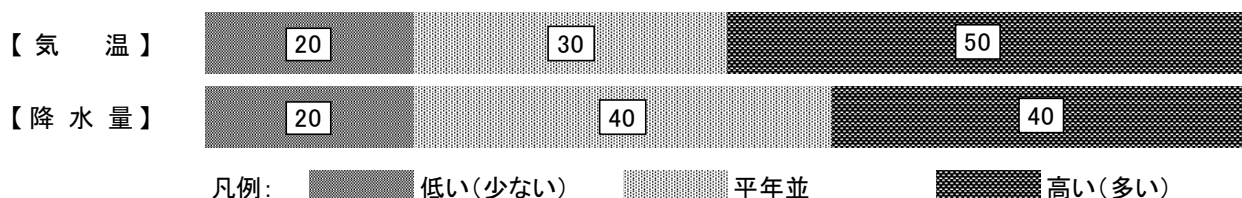
向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

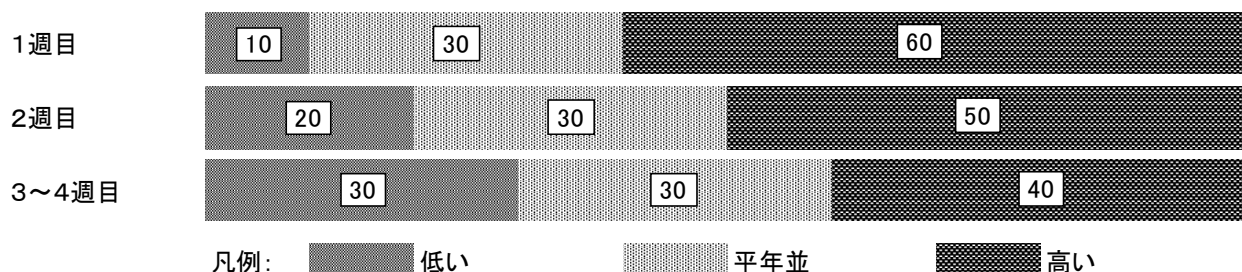
向こう1か月の降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率60%です。2週目は、高い確率50%です。

<向こう1か月の気温、降水量の各階級の確率(%)>



<気温経過の各階級の確率(%)>



普通作物

[イ ネ]

1 ばか苗病（育苗期）

（1）予報の内容

発生量 平年並

（2）予報の根拠

前年の発生は平年並であり、本年用種子の保菌率は平年並と推測される。

（3）防除上注意すべき事項

ア 前年の発生ほ場から採取した籾は、種子として使用しない。

イ 塩水選及び種子消毒を徹底する。

ウ 温湯種子消毒にあたっては、消毒時間、温度などを厳守する。消毒後の種子を保管する場合には、種子を十分に乾燥させ、清潔な冷暗所に保管する。浸種を行う場合には、必ず水道水を使用し、適宜、水の交換を行う。

エ 薬剤による種子消毒（低濃度長時間浸漬）を行う際は、薬液がよく浸透するように網袋にゆとりをもたせる。また、薬液の温度が10℃以下にならないように注意する。消毒後の浸種は停滞水中で行う。原則として水の交換は行わないが、水温が高い場合など酸素不足になるおそれがあるときは静かに換水する。

2 イネシンガレセンチュウ

（1）予報の内容

発生時期 平年並

発生量 少ない

（2）予報の根拠

前年の本虫による葉先枯れ症状の発生はほとんど認められなかったため、汚染籾率は低いものと推測される。

（3）防除上注意すべき事項

ア 前年の発生ほ場から採取した籾は、種子として使用しない。

イ 塩水選及び種子消毒を徹底する。

ウ 温湯種子消毒については、ばか苗病に準じる。

エ 薬剤による種子消毒（低濃度長時間浸漬）の場合、ばか苗病防除薬剤と本虫防除薬剤の混用により同時防除が可能であるが、各薬剤の使用濃度が異なるので注意する。

果 樹

[ナ シ]

1 黒斑病

（1）予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

（2）予報の根拠

ア 平成29年12月上旬に行った越冬菌密度調査の結果、一部で密度の高い園が認められ、短果枝の病芽率は平年と比べてやや低く、一年枝の病枝率は平年と比べてやや高く、一年枝上の枝病枝数は平年と比べてやや多かった。

イ 向こう1か月の気象予報から発生時期は平年並、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 3月の剪定整枝時にトップジンMペースト原液による塗布作業を徹底して行う。特に、枝病斑は2～3年生の側枝に集中して形成されているので、側枝全体をよく見てトップジンMペースト原液の塗布を行う。

イ 3月中旬～4月（発芽期～開花前）になると、芽の動きから病芽がはっきりと判別できるようになる。この時期に園内を2～3回見回り、腐れ芽の園外処分を徹底する。

ウ 薬剤は、発芽期にアントラコール顆粒水和剤500倍液などを散布する。さらに、りんぼう脱落直前にデランフロアブル1,000倍液、開花始めにチウラム水和剤（トレノックスフロアブル又はチオノックフロアブル）500倍液などを散布する。

2 黒星病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア ナシ園における越冬菌密度調査の結果によると、腋花芽の病芽率は平年に比べやや高かったものの、全般的には平年並の越冬量であった。

イ 昨年の発生量は平年並であり、越冬伝染源となる罹病落葉の量も平年並と見込まれる。

ウ 向こう1か月の気象予報から発生時期・発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 4月中旬頃になると、花そう基部病斑が観察し易くなる。この時期に園内を見回り、発病花そうの園外処分を徹底する。

イ 本病が発病した花そうのりん片脱落期は遅れる傾向があるので、花そう基部病斑を探す際によく観察する。

ウ 薬剤は、りんぼう脱落直前にデランフロアブル1,000倍液、開花始めにアンビルフロアブル1,500倍液、交配終了後にチウラム水和剤（トレノックスフロアブル又はチオノックフロアブル）500倍液などを散布する。

3 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 県内巡回調査園におけるハダニ類の越冬密度は、平年と比較してやや少ない。

イ 向こう1か月の気象予報から発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 枝、樹皮及び誘引なわ等に越冬成虫（あるいは越冬卵）が多く認められるナシ園では、春先の蕾や幼葉での被害が予想されるため防除を徹底する。

イ 防除は3月中旬にハーベストオイル100倍液を散布する。なお、発芽期にアントラコール顆粒水和剤を散布するナシ園では、ハーベストオイルとの散布間隔を10日程度あける。

4 カメムシ類

(1) 予報の内容

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

クサギカメムシの越冬成虫数（ベニヤ板トラップ、県下9地点調査）は、トラップあたり6.4頭（前年：5.6頭）で前年と同程度にやや多いことから、春期の発生量はやや多いと見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 山際及び作業小屋周辺では、クサギカメムシ越冬成虫による幼果被害が懸念されるので、3月下旬までに果樹園内の小屋をきれいに清掃し、成虫を見つけ次第捕殺する。

イ 例年カメムシ類の発生が多い園では、4月以降、定期的にはほ場を見回るなどして、春先の発生程度の把握に努める。

野菜

[ラッキョウ]

1 灰色かび病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 2月下旬現在、県東～中部の現地調査ほ場において、例年同様に本病の発生は認められていない。

イ 本病は白色疫病の発生が多いと発病が増加する。本年の白色疫病の発生は平年に比べ、やや多かった。

ウ 本病は3～4月の温暖多雨条件で発生が増加しやすい。向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 早めに防除を行い、予防に努める。特に白色疫病が発生しているほ場では、本病の予防防除を徹底する。

イ 3～5月にフロンサイド水和剤2,000倍液、ロブラール水和剤1,000倍液、カンタスドライフロアブル1,500倍液、セイビアーフロアブル20の1,000倍液、バルコートフロアブル1,000倍液などを輪番で散布する。

ウ 降雨後には、枯れた葉の病斑上に多数の分生子を形成するので、降雨後の防除を徹底する。

[お知らせ]

農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、周辺への飛散には十分注意しましょう。

農薬の詳しい登録内容は、独立行政法人 農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報検索システム」から検索できます。(http://www.famic.go.jp/)

なお、農薬の使用や防除指導等に際しては、農薬のラベルを必ず御確認ください。

<鳥取県病虫害防除所ホームページ>

アドレス <http://www.jpnpn.ne.jp/tottori/>

病虫害発生予察情報、フェロモントラップ調査結果（ナシのシンクイムシ類）などの参考情報、病虫害の診断方法などの情報をお知らせしていますので、ご利用下さい。

<お問い合わせ>

普通作物関係：〒680-1142 鳥取市橋本 260

鳥取県病虫害防除所

(TEL：0857-53-1345、E-mail：boujyot@titan.ocn.ne.jp)

もしくは

鳥取県農業試験場環境研究室

(TEL：0857-53-0721、FAX：0857-53-0723)

果樹・野菜・花き関係

〒689-2221 東伯郡北栄町由良宿 2048

鳥取県園芸試験場環境研究室

(TEL：0858-37-4211、FAX：0858-37-4822)

※次回平成30年度予報第1号の発表は、4月4日（水）の予定です。
なお、予定日と実際の発表日が前後することがありますのでご注意ください。